



子育てを考える その3



自分の意志を持とうとしない若者たち

飽田 典子

○一年生を四回くり返して、やっと目覚めた高校生

太郎君は十九歳ですが、高校一年生を四回くり返しています。中学校の同級生は、皆この春、高校を卒業し、それぞれの道を歩き出したというのに、彼はいまだに一年生に踏みとどまっています。

太郎君が最初に入學した高校は、スポーツ界を代表する名門で、彼は、この学校に三年間、一年生として在籍しました。学校側の例外中の例外の対応の奥に、両親の献身的な努力があるのですが、この間に、彼が登校できた日は、合計で五十日に満たない状態です。



最初の年は、小規模で小じんまりとした中学校から、一学年が八百人を超える大規模な学校に入り、急激な環境の変化に怖じ気づいてしまったこと。男子ばかり黒一色の大集団で、どの顔も野球やサッカーが得意そうに見えて、脅威を感じたこと。授業が始まってからは、受験案内書には書いてない校風が一つずつ明らかになり、  
『果たして自分は、この学校で三年間、やっていけるのだろうか』という、漠然とした不安が湧いてきたことなどが重なっていたところに、四月十七日、この記念すべき日がやってきました。

この年の彼の担任は、カレンダーの日付に当たる出席番号の生徒に、その日一日、日直や、授業中の指名などを、集中して当てることで有名な「名物」教師だったのです。四月十七日は彼の出席番号十七番に当たり、彼のこの日を契機に、全く登校できなくなってしまったというわけです。

○体育が不得意なことなど眼中にない両親

その年の十二月、そろそろ次の年の受験が本格化する頃、今の学校で、もう一回一年生をやりなおすか、自分に合った別の学校を受験しなおすかの選択に迫られた時、両親は、彼の最も不得意な教科が体育であることなど眼中になく、その学校の生徒であり続けることを望みました。

一方、彼はというと、留年したら、今年よりもっと登校できないような気がしていたのですが、それを両親に伝えることができませんでした。相談担当者が「学校へ行くのは両親ではなく、君自身なのだから」と、自分の気持を両親に伝えるよう、彼を後押ししたのですが、その年はとうとう言えないまま、留年が決定してしまいました。

○両親が気負うほど、本人は不在に

前年、ほとんど登校しない状態に終わった負い目からか、両親は、今年こそ、何とか登校させねばと気負って、二回目の一年生を迎えました。学校は「入学式は去

年すませているので、次の日の上級生との対面式から出ればよい」と言ってくれたのですが、両親は、何事も始めが肝心と、入学式からの出席を考えていました。

彼も彼で、二年目は一層行きにくいと言いつつ、春休みに元の担任の先生が彼を学校へ呼ぶと、新しい教科書や、その他の学用品を受け取りに出掛けて行くのでした。そのため、両親も先生方も「ひょっとしたら来るのではないか」と期待した面があったのかもしれない。

こうして、周囲の皆がかたずをのんで彼の挙動を見守る中で、入学式の当日を迎えました。

前日の、何となく不機嫌な彼の様子から、悪い予感を感じていた両親は、この日に備えて家庭教師の学生を早朝から動員して、彼を起こすところから手伝ってもらえるよう、手はずを整えておりました。そして、父親が運転する車に、家庭教師も同乗して、三人がかりでようやく彼を入学式に参列させることが出来たのでした。これを成功と受け取った母親は、自分たちが手をかけることで彼が学校へ行けるなら、毎日でも車で送ろうと、お召車

が玄関に横づけになる日課が続くことになったのです。

○早い時期に自己表現の意欲を持たない子に

私としては、彼が自分の意志で登校するようであれば長続きしないであろうと見守っておりましたところ、案の定、二週間目に、彼はトイレに逃げ込んで、ロックアウトしてしまいました。こうして、再び長い不登校が始まったのですが、正直に言って救われたのは、家庭教師と父親の二人だったかもしれません。

何故これほどまでにしなければならなかったか、その心境を両親にうかがったところ、二年目も去年と同じだったら、無理に籍を残してくださった学校に申し訳ないとのことでした。また、彼が登校できないのは、長い間休んでいたもので、体が慣れていないからと思ひ込み、慣れるまで、親として出来るだけのことをしてやりたかったとのことでした。

そうまでして学校に送り届けられる彼の気持ちはどうなのかを問うと「子どもの頃から自分の意志を表現しな

「子なので……」と、彼の心境を推し測ることなど、考えてみたこともない様でした。こういう両親であるとしたら、彼は元々自分を表現しない子どもであったのではなく、ごく幼い幼児期の段階で、この両親に対して、自分の意志を表現することをやめてしまったのではないかと思われるのですがいかがでしょうか？

#### ○子どもにかわって学校に向く両親

しかし、どうしても学校に未練のある両親は、二年目は、彼に替わって頻繁に学校に向き、各教科の先生一人一人に「どうぞよろしく」と挨拶を始めました。そして「こんなに長く休んでしまっは、途中から出て来ても授業についていけないのでは」と言われれば、今いる家庭教師に加えて、更に別の科目の家庭教師を早速手配したり、学校が開校八十周年の記念事業を計画していると聞くと、何口もの寄付を申し出る等、彼にかわって自分たちが努力することで、学校から見離されるのを必死で食いとめていように見受けられました。

#### ○学校から断わられて、代理人をやめた母親

三回目の一年生をどうするか、学校としては大問題でした。前例がないわけではないにしろ、これまでの経過からみて、籍を残しておいて、彼が出てくる可能性はほとんど考えられません。結局、両親のたつての願いが叶って、例外中の例外として、この年も留年が認められることになりました。母親は、ホッとすると共に、今までどおり新しい担任と毎日連絡をとり、彼の状況を逐一学校に報告するつもりでいたところ、今度の担任は「一々連絡しなくて結構です。普通は欠席届をその都度出していたのですが、彼の場合は学校もよくわかっていますので、登校するという時だけ連絡してください。」と、断わられてしまいました。今まで二年間二人の担任からは言われたことのない言葉だけに、母親は自分の熱意を汲まない極悪人といわんばかりに「理解がない担任だ」「こんな冷たい人が担任になって心配だ」と担任批判をしていました。けれども、一時感情的になったにし

ろ、本人になりかわって、親が手を出しすぎていることを止める効果は大きかったように思われます。

そうして学校に向けていた意識を我が子に向けなおしてみると、彼は丸二年余、何一つ変化していないことに気づいたのでした。これには、さすがの母親も愕然としたようでした。これまで一生懸命奔走してきたのは何だったのか、初めて自問自答するうちに、次第に虚無感に襲われ、何もする気が起こらなくなっていました。時々、こんなことでは、自分がすっかりしなくては、と彼のために何かをしようとすると、胃のあたりが無性に痛くなり、神経性胃炎と診断されてしまいました。両親にとつて、仕方なくではありますが、成りゆきにかかせて静観せざるを得なかったのが、三年目の状況でした。

学校との連絡も、時折、学校から「欠席日数が何日になりました。あと何日で当校の規定により進級は不可能になります」といった事務的なものが入るだけでした。そして、いよいよ欠席日数が限度を越えた段階で「もうこれ以上、籍を置いても意味がないと思いますので、一

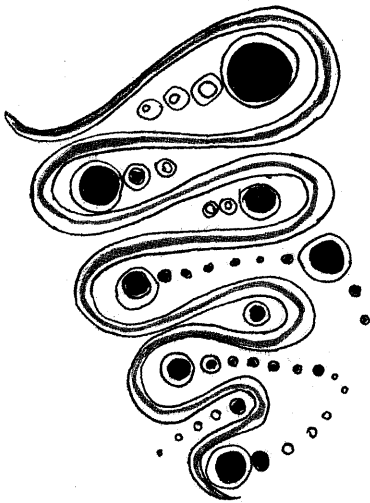
応、退学の手続きをしてください」と言われてしまいました。覚悟していたこととはいえ、いざとなると、何とか三月までと思うのが親心なのかもしれません。この両親も、学校の門をくぐるまでは、この期に及んでも、なおお願いしてみるつもりでいたのですが、今回は、学校側の意志が固く、その場で退学届に署名せざるを得ませんでした。しかし、帰宅して本人には「三月まで籍を残していたから、よく考えるように」としか言えない両親でした。細工をしても、結局本人には分かってしまふことなのですが、何とも切ない親心と思いました。

○退学になって、初めて動き出した太郎君

一方、当の本人である太郎君の、この二年余りはどうであったかという点、本当は、もっと小規模な学校へ行ったかった。二年目は、中学の時の友だちが誰も行っていない高校を受験しなおしたかった。途中でやめて、大検（大学入学資格認定試験の略、文部省が毎年一回実施している認定試験）にしようかと考えた。など、いろいろ

ろ口では言うものの、どの学校にしたいのか探すわけもなく、何一つ自分で動こうとしません。「じゃあ、この次、受験案内書があったら持っていらっしやい。いっしょに見てみよう」と誘うと、案内書は持って来て、身を入れて自分の進路を捜す姿勢ではありません。「この学校には○君が行った」「あっ、ここは従兄の学校だ」といった調子でした。

ところが、いよいよ退学になり、来年受験しなおすとしたら、三歳年下の弟と同じ学年になることに気づいて、初めて彼は、自分が置かれている現実を目覚めたよ



うでした。それからが大変です。あのヌーボーとした彼のどこに、このエネルギーが秘められていたかと思えるほど、積極的に動き出したのです。まず彼が考えたのは、三回目の一年生のうちに、公立のどこかに編入できないかということでした。十二月の半ば、新聞に補欠募集の記事が出ると、かなり通学時間を要する学校にまで片っ端から電話をし、願書の出し方、試験日等を調べ出したのです。しかし、どの学校からも体よく断わられて、ようやく現実の厳しさを、嫌という程思い知らされたようでした。

高校生としての身分がほしければ、来年どうしても受験しなおさなければなりません。体面を気にする両親の思惑を無視して、大検の予備校を見学しつつ、彼が出した結論は、午前中は昼間の定時制へ行って、午後、大検のための勉強をするということでした。

○初めて友だちを連れてきた

同級生より三年遅れて定時制高校に入学した彼は、「自分が一番年長かと思っていたら、上には上がいた。僕はベスト3だった」とおどけてみせ、軽くはずんだ気持ちで新学期のスタートを切りました。そして、今まで人から誘われて、やっと出ていくことはあっても、自分から友だちを連れてきたことなど、全くなかった彼が、  
『現役』の同級生を弟のようにかわいがり、時には学校の帰りに連れてきて、パソコンゲームに興じたり、ロックやニューミュージックのコンサートに出かけたり、まるで別人のような変わり様なのです。

○自分を理解してくれる大人との出会い

元々能力のある彼だったのか、その年の八月、暑い最中に行われる大検に、見事一回で合格し、これで同じ年の浪人生と肩を並べられたと大喜びでした。合格通知が来たのが十月も終わりの頃ですので、それから大学の受験勉強を始めたのでは、到底間に合うわけはありませんが、勢いに乗った彼は、ここで高校をやめて、受験体制に入ろうと、退学を決心しました。

翌日、早速、合格通知を持って担任の先生に申し出たところ、そこで意外な事が起こりました。

担任の先生は快く彼の前途を祝福してくれるだろうと予想は見事にはずれ、「わかった。しかし、君に本当に必要なのは学問ではなくて、人間関係の勉強だ。そして、その勉強が出来るのはこの学校しかないし、年齢的に言っても今しかない。だから、僕は君の退学を認めない。少なくとも、来年の三月、一年生を修了するまで高校生をやるように」とのことでした。彼は「学校をやめるのも楽にいかないもんだなあ」とボヤいてみせました

が、それは、自分のことをよく理解してくれているということへの満足のようにも受けとれました。

○とっくみあいのけんかが出来た

その後、定時制高校の遅い文化祭が、十一月に行われた時のことです。クラスで先生も交えてロックバンドを編成し、演奏しようということで、彼の主張ともう一人のクラスメイトの考えが対立し、いつになく両方とも譲りません。いつもはおとなしすぎることで目立つ二人が、お互いに後に退かないのは珍しいことと注目していると、どちらからともなく手が出て、ついにとっ組みあいのけんかになりました。生まれて初めてのことで、担任は、この時の彼を見て、そろそろ退学を認めてもよいかと思ったのですが、翌日の二人の様子をみてからにしようと、次の日を待ちました。相手の生徒は、ちょっと顔にアザを残しながらではありませんが、登校してきたのに、彼は出てきません。それをみて、担任は、彼の方がまだ弱いところがあるなあと思ったそうです。けんか

をしても、次の日、元気に出てきて、「やあ、きのうはどうも」と言えるようになっては一人前じゃないと論じたものの、「人間、必要な時には、体あたりで自分を主張しなくてはいかんということがこれでわかったと思う。これでやっと退学を許可できそうだ」と、退学のお墨付きがもらえたとのことでした。けれども、彼はこの担任とクラスが好きで、三月まで一年生を続けました。

余談になりますが、彼は、一月末以降「視察」のつもりで何校か大学を受験し、そのうちの一枚に、見事合格しました。けれども、本当にやりたい道ではないので、浪人を決めて、来年の受験に賭けることにしています。

もう一人、別のタイプの無気力な次郎君の例を用意していたのですが、約束の紙面が終わりに近づいてしまいました。

今回は、年長者の例をとりあげたので、一年ごとの動きを紹介した方がとのことで、一例になってしまいました



た。また、幼児期、学童期の親のかかわり方について、全く触れていないのは、子どもが高校生になっても、なお幼児期と同じ姿勢で接している両親の姿が見える例である。と思ったからです。しかし、この例で、今、幼児の教育に携わっておられる方々に考えていただけたらと思うことは、子どもと接する時の「距離」についてです。

太郎君の両親は、子どもと心理的な距離が近すぎる（むしろ、距離がないと言った方が適当かもしれません）親と言えるのではないのでしょうか。子どもが登校できないなら、そのかわりにと、母親が頻繁に学校に通うなど、誰にでも出来ることではありません。かわいさが余って自分の一部でもあるかのような思いで、この両親は太郎君を育ててきたことがよくわかります。

この母親に、太郎君との間の距離をおかせてくれたのが、三人目の担任でした。「一々連絡をしなくて結構です」と断わられて、一時は恨みがましい気持ちでいましたが、いつまでも無自覚に、彼の代理人をつとめる母親が

ら脱皮できたのではないのでしょうか。

この例をみて、子どもをかわいがることと、子どもに子ども自身の意志を育てることとは、育児の中で別の作業であることを教えられたように思います。実際、彼は、母親が代理人であることをやめ、退学という現実には直面して、ようやく自らの考えで動き出しました。

最後に、アンソニー・ストー<sup>④</sup>の言葉を引用して稿を終わりたいと思います。

子どもを最大限に甘やかし、「譲りすぎる親には、子どもたちがたち向かうことができなしいし、反抗すべき権威もないし、独立しようとする内的な衝動を正当化することができない」

④「人間の攻撃心」アンソニー・ストー著 高橋哲郎訳 晶文選書39

（東京都立教育研究所）